

# 令和8年度 家庭部会研究計画

## 1 研究主題

自らよりよい生活を創り出そうとする子供の育成  
ー学びの質を高める家庭科の授業の実現に向けてー

## 2 研究主題設定の理由

これからの社会は、少子化・高齢化、グローバル化、生成AIの加速度的発展等、先行きに対する不確実性が高まっており、子供たちは激しい変化が止まることのない時代を生きることになる。そのために子供たち一人一人が、自らの人生や未来を切り拓き、多様な他者と協働し、当事者意識をもち問題を発見・解決して持続可能な社会と幸福な人生の創り手となるために必要な資質・能力を身に付けることが求められている。

家庭科においては、生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、衣食住に関する実践的・体験的な活動を通して、生活をよりよくしようと工夫する資質・能力を育成することを目指している。本県児童の実態としては、次の課題が挙げられる。

- 日常生活の中から問題を見いだして課題を設定すること
- 班活動や学級で発表するときに、自分の考えを説明すること
- 友達や周りの人の意見を参考にして、考えを深めること
- 学習したことを振り返って、生活をよりよくする方法を考えること
- 学習したことを家庭・地域で実践すること

そこで、研究主題を「自らよりよい生活を創り出そうとする子供の育成」とし、副主題を「学びの質を高める家庭科の授業の実現に向けて」と設定した。

## 3 研究主題・副主題について

### (1) 「自らよりよい生活を創り出そうとする子供」とは

- 日常生活に必要な知識が既存の知識や生活経験と結び付けられ、学習内容の本質を深く理解するとともに、それらに係る技能を活用できる子供
- 日常生活の中から問題を見いだして課題を設定し、課題を解決するための解決方法の検討と計画、実践活動、評価・改善することにより、課題を解決する力を身に付けた子供
- 家族や地域の人々との関わりを考え、家族の一員として、身に付けた力を主体的に実生活に生かそうとする子供

### (2) 「学びの質を高める家庭科の授業」とは

- 児童が小学校学習指導要領解説家庭編に示されている資質・能力を着実に身に付けることができる授業
- 児童が課題を自分事としてとらえ、課題を解決するための解決方法の検討と計画、実践活動、評価・改善する問題解決的な学習の充実を図り、一連の学習過程を「とらえる」「見通す」「確かめる」「振り返る」「生かす」として課題を解決する力を養うことができる授業
- 教師が子供の姿を予想しながら、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を進める授業を構想し、児童が多様な他者と対話することにより自分の考えを広げ深めたり、表現したりする授業

### (3) 「自らよりよい生活を創り出そうとする子供」を育成する「とくしまモデル」及び「とくしま授業スタイル」について

育成する資質・能力のために授業改善を図り、題材構想するとともに、子供の実態を把握し、実態を基に子供の思考に沿って授業構想する。本部会が目指す家庭科の授業を「とくしま授業スタイル」として意識することで、資質・能力が育成できると考える。

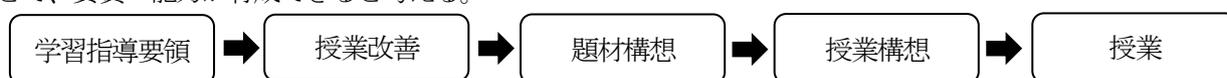


図 とくしまモデルのイメージ

とくしま授業スタイル

- ㊦「とらえる」 子供の学びは、課題を解決するために自分事として問題を「とらえる」課題設定
- ㊧「繰り返す」 子供と教師が、課題を解決した姿を共有し、繰り返し課題を振り返る
- ㊨「しかけ」 子供の姿を予想した授業構想で、わくわくするしかけと個に応じた手立て
- ㊩「学びの持続」 子供が学ぶ意義を感じ、実生活につなげる

4 研究内容

(1) 指導計画の工夫

① 2学年間を見通した指導計画

2学年間の学習の見通しをもち、子供や学校、地域の実態に応じて家庭科で育みたい子供の姿を明確にする。家庭科の学習内容や他教科等との関連を明確にし、中学校技術・家庭（家庭分野）のつながりを意識して指導できるよう、教科等横断的な視点で題材配列や題材構成を工夫した年間指導計画を作成する。

② 学校行事や他教科等との関連を図った指導計画

学習したことを家庭生活に生かし、実践することで、児童が学習と生活がつながるよう工夫する。課題を解決する過程で、児童が家族の一員として自分が成長していることを自覚でき、家庭生活を大切にしようとする意欲や態度が育まれる。学校行事や他教科等との関連を図る際には、総合的な学習の時間と家庭科では、目標が異なることを意識し、指導計画を立てることに留意する。

(2) 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善

① 資質・能力を着実に育成するための授業の構想

題材の導入に当たっては、教師が授業を構想することで題材を深く理解し、授業改善の視点を明確にした授業づくりができると考えられる。児童の実態や家庭の状況を十分配慮したうえで、題材における児童の発言や行動などの姿を具体的に予想しておくことで、授業改善を図る。児童が「見方・考え方」を働かせることができるよう授業を構想し、様々なしかけを工夫したり、手立てを準備したりしておくことが必要である。しかけと手立てを次のように設定する。しかけは、確かな意図や効果をもち、ねらいを実現するために教師が行う工夫である。手立ては、「努力を要する」状況(C)から「おおむね満足できる」状況(B)にするための支援である。

表1 授業構想における目指す子供像のためのしかけと手立ての例（一部省略）

学習過程	目指す子供像	教師が行う具体的なしかけと手立て
とらえる ↓	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習のゴールを明確にもち、題材を通して、課題を解決するために見通しをもつ</li> <li>・日常生活の問題発見や課題解決に取り組む</li> <li>・学んだことや身に付いたことなど、学習を振り返る</li> <li>・実践を振り返り、新たな課題を見付ける</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習した内容を実際の生活で生かす場面を設定し、自分の生活が家庭や地域と関わっていることを認識できるようにする</li> <li>・自分の成長を自覚して実践する喜びに気付くことができるようにする</li> <li>※学ぶ内容を自分事にする</li> <li>※必要感と期待感をもち、課題に対してどうだったかを意識する</li> <li>※児童のレディネスを十分に見取る</li> </ul>
見通す ↓	<ul style="list-style-type: none"> <li>・児童同士で協働し、意見を共有して考えを広げたり深めたりする</li> <li>・家族や身近な人との会話を通して新たな視点に気付く</li> <li>・教材や資料、実物を見て、考える</li> <li>・人、もの、自分との対話をする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「分かった」「できた」ではなく、なぜ、そのようにするのか科学的な根拠とともに理解し、技能として身に付けることができるようにする</li> <li>・対話が生じやすい状況をつくる</li> <li>※児童が話し合いたい状況をつくる</li> </ul>
確かめる ↓	<ul style="list-style-type: none"> <li>・問題解決的な学習の過程の中で「見方・考え方」を働かせながら、課題の解決に向けて自分なりに考え、表現する</li> <li>・日常生活に必要な知識を相互に関連付けて深く理解し、技能が定着する</li> <li>・生活をよりよくしようと工夫する実践的な態度が身に付いている</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「何をしているか」「なぜ、これをしているか」「したことは何か」が分かる</li> <li>・変化する状況や課題に応じて主体的に活用する技能となるようにする</li> <li>・「見方・考え方」を働かせている子供の姿を見取る</li> <li>・学習したことと生活とがつながることを理解できるようにする</li> <li>※児童の思考を深めるために問い返す</li> <li>※意思決定する場面では「あなたはどうするの」と自分に返す</li> </ul>
振り返る ↓		
生かす		

主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を進めるに当たり、学びの深まりの鍵となるのが「見方・考え方」である。問題解決的な学習（一連の学習過程）を通して、生活経験や学んだ知識を関連付けて考え、理解を深めていく。その過程で本質的な概念が習得され質的に高まったり、技能が定着したりする。「生活の営みに係る見方・考え方」の4つの視点は混在しているため、授業において「見方・考え方」を取り上げる必要はないが、教師はその題材で児童がどの「見方・考え方」を働かせるかを構想しておく。「見方・考え方」については、教えたり、「どの見方・考え方を働かせたか」と質問したりするものではない。また、「見方・考え方」を働かせることができたかどうかを評価するものでもないことに留意する。

表2 「生活の営みに係る見方・考え方」の子供の言葉の例

見方・考え方	内容	子供の言葉
家族や地域の人々との協力	A家族・家庭生活	力を合わせる、助け合う、仲よく、つながり
健康・快適・安全	B衣食住の生活	体によい、過ごしやすい、便利、気持ちよい
生活文化の大切さに気付くこと	B衣食住の生活	生活の知恵、伝統を守る、昔のよさ
持続可能な社会の構築	C消費生活・環境	環境、エコ、地球にやさしい、将来のため

## ② 問題解決的な学習の充実

これからの社会における急激な変化に、主体的に対応していくためには、自ら課題を設定し、解決していく力が必要となる。児童が課題を自分事として主体的に課題の解決に向けて取り組む問題解決的な学習が重要であり、これは従来より家庭科の学習で取り組んできた学習である。問題解決的な学習では、「思考力、判断力、表現力等」を育成することにより課題を解決する力を養う。さらに、問題解決的な学習を積み重ねることで、児童が「学び方」を身に付けることができるようにする。

下記の学習過程は例示であり、題材ごとに学びの質を高めることができるよう学習過程を設定する。本部会では、問題解決的な学習の過程を「とらえる」「見通す」「確かめる」「振り返る」「生かす」で表している。児童が現状から課題を見いだして、よりよい生活に向けての課題を設定する。題材を構想する際には、教科等横断的な視点やICT活用の場面等を想定し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を図り、学びの質を高めることができるよう工夫する。各題材で児童に「何をどのように学ばせるか」「何ができるようになるか」が明確になり、家庭科における資質・能力の育成を図ることができるように考える。

「問題」とは、自分の生活を見つめて振り返ることで、児童が今ある現状と、ありたい・なりたい姿をイメージして願いをもつことである。自分の生活を見つめ直す場面の設定と必要感をもてるようにすることが重要である。

「課題」とは、現状とありたい姿のギャップを埋めるための具体的な方策である。今まで何気なく過ごしていた日常生活を振り返り、実物、インタビュー、アンケート等のしかけにより課題を設定できるようにする。個人の課題から全体の課題設定、又は全体の課題から個人の課題設定をするなど、題材によって検討する。また、題材を通して、児童が常に設定した課題を意識できるように、課題に対してどうだったかを振り返るようにする。

表3 問題解決的な学習（一連の学習過程）とポイント

学習指導要領	本部会	ポイント
生活の課題発見	とらえる	生活を見つめ、解決する必要がある課題を児童と設定
解決方法の検討と計画	見通す	見通しをもち、課題の解決に近付けたことを意識化
課題解決に向けた実践活動	確かめる	学校・家庭・地域において実践
実践活動の評価・改善	振り返る	児童にとって評価・改善の必要性
家庭・地域での実践	生かす	実践する喜びを味わわせ、自信につなげる

※全てがこの学習過程ではなく題材構成により異なる。

### ③ 資質・能力を育成するための ICT の効果的な活用

1人1台端末を、育成する資質・能力や学習活動の目的に応じて効果的に活用し、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実していく。例えば、ワークシートの代わりに、学習ツールやオンライン機能を使って課題を配付、回収したり、情報収集や写真・動画による記録、協働での意見を整理したりするなどして、学習効果を高めていく。1人1台端末を活用することで児童の情報活用能力の向上を図ったり、児童同士で ICT スキルを教え合う雰囲気醸成したりする。問題解決的な学習と情報活用能力の一体的な充実を図るようになる。

表4 ICT の日常的・効果的な活用例

育成する資質・能力	目的	実践例
○知識及び技能	動画や写真を視聴する	ボタン付けや野菜の切り方
○思考力（プログラミング的思考）	繰り返して試し、考える	製作計画や調理実習の手順の検討
○新たな課題を発見する力 ○発信する力	実習や実践、考えを記録する	振り返る、ポートフォリオ 家庭実践（ビフォーアフター） ペア調理、撮影機能による評価・改善
○根拠を明確にして説明する力 ○比較・関連付ける力	考えや情報を共有し、時間を短縮する	比較実験の結果、付箋機能 リアルタイムによる意見集約の分析
○表現力 ○論理的に説明する力	共同で編集する	解決方法の検討 共同でのレポート作成

### (3) 学習評価の工夫

#### ① 育成する資質・能力を明確にした指導と評価の計画

児童が考えることと教師が教えることを整理し、学習を「とらえる」「見通す」「確かめる」「振り返る」「生かす」の一連の学習過程を児童の姿で考える。それをもとに児童に確実に資質・能力を育むことができるよう各題材で育てたい資質・能力を明確にして、学習活動に沿った評価規準や評価方法を明記した指導と評価の計画を作成する。必要があれば、児童の学びの姿から計画を修正することも重要である。

#### ② 目標に照らしての実現状況を子供の姿で具体化

学習指導要領に示されていることは、「おおむね満足できる」状況（B）である。「おおむね満足できる」状況（B）の評価規準の具体を子供の姿で明確にしたうえで評価方法を検討する。また、全員が（B）となる授業づくりを目指すため、「努力を要する」状況（C）を「おおむね満足できる」状況（B）にするための具体的な手立てを講じておく。さらに、「十分満足できる」状況（A）の具体を子供の姿で考える。

「知識・技能」の評価については、児童が見通しをもって学習に取り組むことができるようにするために目標に基づく評価規準を明確に示す。目標が達成されたかどうかを児童自らが振り返り確認することで、「知識及び技能」の定着を図る。

#### ③ 児童が学びや変容を実感できる評価

課題を解決するための実践後の評価・改善の過程を重視し、振り返りの記録を蓄積する。児童が解決できた達成感や実践する喜びを味わい、次の学習に主体的に取り組めるようにする。「主体的に学習に取り組む態度」の評価に当たっては、題材を通したまとまりの中で、児童が学習の見通しをもち、振り返ることができるものや、教師が思考の流れを見取りながら一連の学習過程を通して総合的に評価できるようにする。

学習活動に即し、総括的な評価だけでなく形成的な評価を行う。例えば、「知識・技能」では、事実的な知識の習得と概念的な理解をテストやワークシート、作品等から評価する。「思考・判断・表現」では、論述やレポートの作成、調理や製作計画・実践記録表、グループでの話し合い等から評価する。「主体的に学習に取り組む態度」では、ノートやレポート等における記述、学習前後の比較ができるようなワークシートや行動観察等から評価する。

さらに題材全体を通して、自ら学習を調整する力が育まれたかを見取るために、振り返りシートを作成する。そして、児童が学習への見通しをもち、学習前後の自己の学びや変容を実感し、自信をもって次時への課題解決に向けて取り組むことができるようにする。教師は、振り返りシートを通して、実現している学習の状況を的確に捉えることができ、授業改善に生かしたり、評価したりすることができる。と考える。